

拝啓 今年も早や9月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。今年も、9月も下旬というのに秋らしいさわやかな日が少ないと感じています。我が家の軒下には、夕顔が大きく伸びて病室の日よけ止めの役を果たしてくれています。

今回は、小西芳之助先生の『コリント人への第二の手紙講解説教』からの引用の2回目ですが、今回の「エンカウンター」の6ページ、「天国への橋」となりたい」という項目には、次のようにあります。

「新渡戸先生の夢、願望は有名な話ですが、「太平洋の橋となりたい」ということでありました。東西の文化のブリッジです。私は、稲造先生の小さな弟子として「天国への橋」となりたいと思っています。この世では、ちっとも善行が出来なくともよい、この世で喜びがなくともよろしい。この世において、平安な心がなくてもよい。ただ、天国へ行く橋となりたい。そして、これはもう私だけではありません。誰でもが橋となれる。先日、天に召された村田スミ姉の如きは、日本の国のために、この社会のために、というようなことは、一言も言われませんでした。……まず、自分自身の存在が、即ち「香り」を放つようになり給え。一人が改まったら、日本の社会が改まります。……これは可能です。福音を勉強して、福音が我々のものになったら、自然とそうなります。諸君、これから一緒に聖書を勉強しましょう。聖書の勉強を抜きにして、そのような人になる方法はありません。

「信仰は聞く事から生じ、聞くことは神のことばによる」とパウロは言いました。我々は、神のことばを聞き足りません。まだ、勉強がたりません。」

キリスト教の伝道者、牧師で、「天国への橋となりたい」とまでおっしゃった方は少ないと思います。

それにしても今回のエンカウンターの見出しを見ると、「信者と悲しみと苦しみを助ける熱情」「わたしたちは、キリストの香り」、「do よりも be」、「天国への橋となりたい」、「キリストの紹介状」、「永遠不滅の生命を持つ人は、この世から輝く」、「受けるだけ」など、コリント後書には、大切な言葉が何と多く含まれているのだろうかと思います。

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』9月24日

「再び、私の英語の座右の銘

イエスの名を呼びつつ、私はゆっくり歩いている。

イエスの名を呼びつつ、私は何でも為し、どこへでも行く積もりである。と言うのは、イエス・キリストがいて下さるからである。私は、それを為すのに急がずに、ゆっくり、そしてありのまま、イエスの許し給う分量だけなす。と言うのは、私がなすのではなく、イエスが私を通してなして下さるからである。

このように、イエスの御名を呼ぶことは、私を天国に導いて下さるのみならず（ロマ書10章13節）、日々私の務めをなす助けとなる。」

新渡戸稲造先生『一日一言』9月1日

「よかれあしかれ、人間としてこの世に生まれたことを思えば、造物主に感謝せずにはおられぬ。幼少の折父母の温かき愛に育てられたことを思えば、親兄弟に感謝せずにはおられぬ。今は学校に行きて学び、あるいは安んじて食を営むことを思えば、国と君に感謝せずにはおられぬ。」

松下幸之助先生『道をひらく』「学ぶ心」

「自分ひとりの頭で考え、自分ひとりの知恵で生み出したと信じていても、本当はすべてこれ他から教わったものである。

教わらず、学ばずして、人は何一つ考えられるものではない。幼児は親から、生徒は先生から、後輩は先輩から。そうした今までの数多くの学びの上に立ってこそ自分の考えなのである。自分の知恵なのである。だから、よき考え、よき知恵を生み出す人は、同時にまた必ずよき学びの人であると言えよう。

学ぶ心さえあれば、万物すべてこれ我が師である。…

これらすべてに学びたい。どんなことから、どんな人からも、謙虚に素直に学びたい。」

内村鑑三先生『一日一生』9月17日

「パウロのいわゆる「霊の質 (かた)」とは、信者の復活体の始めであって、その核心とも称すべきものである。信者はこれを受けてすでに復活体の元質を受けたのである。「霊の質」の成長発達したるもの、それが復活体である。復活体は、死後に於いて奇跡的に上より着せられるものではない。その元質は、信者が信仰状態に入りしその時に既に与えられしものであって、死後にその完成に達するものである。かくして信者の復活は半ば未来の希望に属し、半ば既成の事実である。信者はすでに復活の言質をにぎる者にして、同時にまた主と共にその栄光をもって顕れんこと待つものである。信者はその肉体においてすでに復活体の種子とその核心とを持つ者である。彼はいますでに復活されつつあるものである。」

パークレー先生「一歩 (1)」8月8日

「たくさんの仕事をしなければならないとき、まずなすべきことは、とにかく仕事を始めるということである。

そんなことは言われなくてもわかっている、とおっしゃるだろうが、やはり言うておく必要があるのである。たくさんの仕事を前にした時、ただ座ってこれを眺めている——これが最大の誘惑である。そんなとき、われわれは何となく虚脱感に襲われ、ただ坐って仕事の山を眺めては、どうしたものかと考え込んでしまう。そのような場合、片付けなければならないのが手紙書きであろうと、皿洗いだろうと、あるいはまた説教の準備、訪問、試験準備、その他なんであろうとも、まずなすべきことは、どこからでもいいから始めることである。

始めさえすれば戦いは半ば勝利を収めたも同然である。

仕事をうまくやる唯一の方法は、それ以外に仕事がないかのようにやることである。そ

ういう気持ちでやれば、何も考えなくとも、もっと大きな、もっといい仕事が手に入るものである。」

カウマン先生『日の出に向かって』8月26日

「私たちは、アルプスの登山家のようにしなければなりません。私たちは頂上を目差して登る者として、案内者の強い支援を受けなければなりません。手近な所を見ましょう。絶壁から下を見るならば、めまいがするでしょう。あまりにも遠い前方を見るならば、私たちは落胆するでしょう。むしろ、私たちの弱い手をキリストの力強い愛の御手に置き、そして「恐れるな、ただ信頼せよ」と言われる主の励ましの御言葉に、絶えず耳を傾けましょう。」

高円寺東集会は、現在は東大YMCAの礼拝堂を借りて、第2、第4日曜日に開催しておりますが、先日、六義園そばにできた新しい今井館を見学させていただき、1月からは新しい今井館で開催しようとして決めて、使用申し込み書を送りました。今井館の図書室を見学しましたが、小西先生と南原先生のこれまで出版した本が全部所蔵されているのを見て、感激しました。国会図書館と今井館図書館に行けば、小西先生と南原先生に関して、これまで発行された本のほとんどが全部保管されているはずです。

新型コロナの拡大が収まりつつあるように見えますが、マスク、手洗い、うがいなどはこれまで同様実行されて、またワクチン注射は打てるときに打つという方針で行かれまして、十分ご注意下さるようお願い申し上げます。

9月23日

山口周三

エンカウンターのご読者各位